

近頃「反知性主義」という言葉をよく見かける。若者が本を読まない風潮や、隣国を感情的にこき下ろすといった知性軽視の態度に対し、これを批判する際に使われる。しかし、神学者の森本あんり・国際基督教大学務副学長(58)の『反知性主義』(新潮選書)は、この精神態度がもともとアメリカのキリスト教の中から生まれ、そこには積極的な意味もあることを教える。(文化部 植田滋)

同書によれば、反知性主義という言葉は、米歴史家リチャード・ホフスタッターが『アメリカの反知性主義』(1963年刊)の中でマッカーシズム(赤狩り)の系譜をたどる際に注目し、広く使われるようになった。社会のエスタブリッシュメント(支配階級)が

原点・米国から捉える「反知性主義」

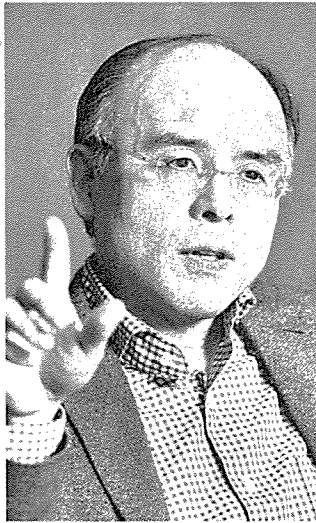
知性を権威として不当に使用することに對し、これに反発する態度を指す。

始まりは、ヨーロッパからアメリカに渡ったピューリタンの「極端な知性主義」に求められるという。先鋭的なプロテスタントである彼らは聖書への立ち返りを奨励したため、聖書の読解に優れた指導者のもと、極めて高度な知的社会を築いた。しかし、何時間も説教

が続くような重苦しい社会に、「耐えきれず、うんざりする人々が出てきて、反知性主義が芽生えた」と森本さんは説明する。

「プロテスタントはもとも抗議する人。そこにはエスタブリッシュメントに反発する思想が埋め込まれており、ピューリタン社会が実現すると、今度はこれに反発する人が出てきた」
こうした反発を吸い上げ

既成秩序 前向きに変革



「イエスは律法学者や宗教的権威を批判したが、それが反知性主義の出発点になっている」と語る森本さん

る役割を果たしたのが、18世紀に始まり、以後アメリカで間欠的に繰り返された「信仰復興運動」だ。宗教的回心が次々に起こり、各地で熱狂を生み出していく。キリスト教のリバイバル運動だが、これが反知性主義に形を与えた。「学のある者もない者も、インテリも小学校すら出ていない者もみな同じ」という平等観に支えられ、既成の教会秩序

を越える運動だったからだ。
信仰復興運動について、森本さんは「要するに集団ヒステリー」と評する一方、「既存の権威や体制を変革していく力の源泉になった」と肯定的にも捉える。

回心は権威によってではなく、自らの信仰への確信によって達成されるため、周囲の反対を押し切っても信念を貫く胆力や、フロンティア精神を生み出す。単なる嫉妬心からくる「反権威」とは異なる、より前向きな姿勢があるという。「反知性主義は知性そのものへの反発ではない。あくまで権威と結びつくことへの反発だった」

このような捉え方で現代の日本を見ると、「むしろ反知性主義が不十分に見える」と言う。例えば、東大を頂点とする知的序列は今も強固。「反権威」も、単に嫉妬心に根ざしたものに陥りがちだ。こうした状況を乗り越え、「既存の知的序列とは異質で多様な知性が日本で育つためにも、いい意味での反知性主義はもっと広がってほしい」。